平成１８年１０月２８日

羽村市サッカー協会少年部

審　判　部　会

第１回　審判講習会

１．　少年部　部長　挨拶

２．　審判部　部会長　挨拶

３．　審判講習

（１）ルールブックに記載されていない１８条

（２）第 11 条　オフサイド

（３）第 12 条　ファウルと不正行為

（４）2006 年度競技規則の改正点

４．　質疑応答

５．　其の他

ルールブックに記載されていない18条

●ファウルのとれない審判員

兎に角ファウルがとれない審判員が多い。これは選手が倒れなければ
笛を吹けない。選手が倒れなくともファウルがあったら適切にファウルを
とれなければならない。
ルールブックの12条のキッキング・ホールディング等のファウルの種類は
理解していても、どの程度がファウルなのか、転ばなければ判らない。
ファウルの程度、プッシングなどの力加減は審判の思考に個人差がある為
なかなか同じレベルに統一出来ない。然しながらレベルの高い審判員は
経験や講習会・試合後の反省会等により、高いレベルで統一されている。
ワールドカップの審判員は各国・各リーグでジャッジレベルの差異があっても
ワールドカップの事前打ち合わせでレベル統一がされている。

※ファウルのとれない初級審判員でも段階的にレベルアップが可能です。
1)些細なファウルでも先ず笛を吹きファウルをとろう。
何のファウルなのか？キッキング・プッシング・トリピング等をはっきりと判る
様にする。(ファウルが起きそうな局面を予測して出来るだけ近い位置どりをする)
些細なファウルをとるとゲームが途切れ々なり、ゲームのスムーズな進行が
出来なくなり、当該チームのコーチや選手よりあれがファウルなのかと言う
クレームがでても最初は出来るだけファウルをとる様にする。
ファウルが全然とれずに、ただゲーム荒れてゲームオーバーでは進歩がない。
2)ファウルがとれる様になれば、次は選手の身体能力・体のバランス・ゲーム展開を
見て、選手が頑張れるか又は直ぐにファウルをとった方が、ファウルをされた方が
有利かを考える。つまりアドヴァンテージを上手に採用するかが第二段階になる。
第三段階はアフターファウル・第四段階はファウルを誘うファウル及び主審を欺くことを
意図したシミュレーション。

●笛の音

ゲーム中のコントロールは主審の①笛　②ジェスチャー　③言葉によって行われるが
基本的には競技者はゲームに集中している為、ジェスチャーや言葉は分からない為
笛の音が重要になる。従って笛の音が弱いとプレーが止まらなくなる。
自分のジャッジに自信のない審判員は総じて笛の音が弱いものです。
笛の音は強弱・音の長短をつけ、感情を込めて強く吹くこと。
悪意のあるファウルには強く厳しく笛を吹き、オフサイドには笛の音を
長めに吹く。その他ゴールインやキックオフ等は講習会の実技で教習する。
※迷い笛・・・・ファウルをとるのか、とらないのか迷って笛を口まで近づけるのは
止めよう。一度迷い笛をすると、その後笛が吹けなくなる。
自信のある審判員は笛の音が強く、ゲームコントロールが上手い。
※巻末のファウルの図を参照。
※選手交代・怪我・その他で笛でプレーを止めたら、必ず笛でプレーを再開する。

●注意・警告・退場（カードを出せない審判員）

警告・退場となるファウルは競技規則第12条に各々7項目ありますが、
実際の警告・退場になる反則にも適宜カードを出せない審判員が多い。
Jリーグ、社会人リーグでは可也カードを出していますが、少年・少女に対しては
カードを出すと可哀想とか子供だから"まあいいか"で処理しがちです。
これは間違いです。子供の時から悪質ファウルはカードを出して指導しないから
大人になっても悪質なファウルやゲーム態度が悪くフェアープレー精神が培うことが
出来ないのです。
まわりの目（各々対戦チームのコーチ・観客）を気にしてカードが出せない審判員は
問題があります。
カードは出来るだけ出す様にしなければなりません。
但しカードを出す根拠のルール12条の1（反スポーツ的行為を犯す）とか12条の2項とか
必ずカードを出す理由を明確にしなければなりません。
※カードを出し易くする訓練はありませんが、経験と"注意"を上手に使う事です。
"注意"というカードはありませんが、警告となる前の"注意"です。
例えば選手が"手"を使って相手を頻繁にブロックしたり、手で相手を抑えたりする事が
多い選手には、先ずファウルをとり、口頭でその選手に"手を使うな"と注意します。
その後同じ選手が"注意"したのに、かかわらずファウルをした。
これは第12条3項（繰り返し競技規則に違反する）に該当するので"警告"の
イエローカードを出します。一回で警告や退場になる違反には厳しく対処しなけば
なりませんが、遅延行為や手を頻繁の使う選手には、先ず口頭で"注意"してから
カードを出すと、カードが出し易くなります。
その他コーチの指導が悪いチームの選手は審判員（主審・副審）に対して異議をします。
審判員の誤審であれば仕方が無いことですが、審判員の自信のあるジャッジに対しても
異議を示せば第12条2項によりイエローカードを出します。
自信の無い審判員なのかルールを知らない"優しい"審判員なのか分かりませんが
イエローカードを出しません。これでは文句を言われても何もしない、威厳のない審判員
です。
例えば主審のジャッジに対して"え～"と言う選手がいます。この意味は
"え～違うんじゃないの"と言う審判に対する異議です。然しながら"え～"だけでは
イエローカードは出せません。一回目の"え～"に対し口頭でその選手に注意します。
二回目"え～"でイエローカードを出します。この様に程度の軽い競技規則違反に対しては
"注意"して繰り返し行えばカードは出せるのです。

スローイングの距離（2m）を守らない守備側の選手、フーリーキックの距離を守らない
守備側の選手に対しても、プレーがスムーズの行われる様に口頭による注意を
上手に使いましょう。

※レッドまたはイエローカードは、競技者または交代要員あるいは
交代した競技者にのみ示す事ができる。
ベンチにいる監督・コーチに対してはカードを使用しない。
監督・コーチには口頭で"警告"・"退場"と言い渡す。

●覗き(のぞき)審判
主審・副審を問わず、身体の上半身を左右や前屈みして選手の動きを見ている審判員が多くみかけます。これは全く良くない事です。主審も副審も姿勢は直立で背筋を伸ばすのが正しい威厳のある姿です。覗くと言う行動はポジショニングが良くないことになります。
覗かないで良いポジションに一歩でも二歩でも移動して、両競技者の競り合いが見える位置に動くことです。良い主審は試合中は立ち止まらないで、常に動いています。

●P.K.がとれない審判員
ペナルティーエリアで攻撃側のチームの選手が、直接フリーキックとなるファウルを被っても、P.K.をとれない審判員がいます。
P.K.は出来るだけ選手の近いポジションで見て、視認し自信もってとることです。
選手より離れた位置でP.K.はとれません。またセンターサークルあたりからP.K.の笛を吹いても誰も信じてはもらえません。 主審のポジショニングが重要です。

●コーナーキック
コーナーキックが行われる場合、対角線審判法の主審サイドの場合には、主審はまず
①ボールがコーナーアーク内に入っているか、または線に掛かっているかを、確認にコーナーの近くまで移動する。
②守備側のゴールキーパー・守備側選手と攻撃側の選手の小競り合いがあるかを確認する事。手をつかったブロックがあれば、笛を吹き注意を行う。

●フリーキック
ファウルがあり主審が笛を吹き、攻撃側への手の指示をした後・・・・
①主審はキッカーの意図をよむ・・・・直ぐリスタートをしたいのかどうか。
守備側の壁が近くても、キッカー側のアピールがなければ、そのまま蹴らせる。
キッカー側のアピールがないのに主審の勝手な判断で、再度笛を吹きプレーを止めフリーキックの適正距離まで守備側競技者を下がらせてから、プレー再開の笛を吹く主審がいるが、この行為は適切ではない。
攻撃側のカウンター攻撃で守備側がファウルをした時、守備側が2人しかいない場合壁の距離が近くてもアピールがなければ、蹴らせる。
主審はキッカーの意図を迅速によむ、選手がどうしたいのか。
下手にプレーを止めると、守備側の選手が戻りデフエンスを固めてしまって、ファウルをされた方が、二度の不利益を被ることになる。
②守備側の遅延行為
ファウルがおきて攻撃側の選手がリプレーを早くしようとした時、守備側の選手が意図的にボールの前に立ってプレーを遅らせようとした場合は、遅延行為によるイエローカード(警告)ですが、守備側選手が遅延行為をすると予測できそうな局面は主審は声で注意して、守備側選手をボールの前に立たせない様する。
③フリーキックの壁は9．15m(少年は7m)ですが、前ばかりではなくキッカーの横側も距離を守らせる様に注意する。

●プレーオン(アドヴァンテジ)とノーファウルの間違い
初級審判員も経験を積んだ審判員も未だにプレーオンとノーファウルの使い分けが
出来ないでいる。プレーオン(アドヴァンテジ)とはファウルがあったが、プレーを止めて
ファウルをとりフリーキックをとるより、流して様子をみたほうが、ファウルをされた側が
有利にゲーム展開が出来ると主審が判断した場合に採用する。
だだし予測した有利性がない場合は、ロールバック(最初にファウルがあった地点に戻す)して
ファウルをとる。(判断時間は約2～3秒を目安とする)
※問題はファウルもないのに、プレーオンと言う主審がいる。これは単にプレーを続けなさいと
いう意味で言っている。
ファウルがなく、ただ転んだだけでプレーが止まりそうになったので、プレーオンと言ってしまう。
これは間違いで、この場合はファウルがないのだから、"ノーファウル"と言う。
プレーが止まりそうだったら"続けなさい"と言えば良い。
プレーオンとノーファウルのジェスチャーは声と一緒に示すと良い。

●審判員の協力体制
主審・副審(A1/A2)・第4審は試合の開始前に必ず打ち合わせを行う。
主審は副審・4審に何をして欲しいか、どの様な協力が必要かを打ち合わせる。
①主審・副審のアイコンタクト(誤審なきようにお互いに、アイコンタクトで確認しあう)
②シークレット サインの確認(タッチライン・ゴールラインにボールが出た時、見逃した場合の
サインはロスタイムのサインは事前に決めておく)
③第4審にはタイムキーパー・予備ボールの管理・選手交代等を頼んでおく事と、
ベンチの管理(コーチ・選手の審判に対する異議・良識のない言動)と観客の監視は
現在非常に問題になっているので、良識のない言動の選手・コーチ・観客があったら
特定してもらい、アウトプレー時に主審に報告してもらう。
第4の審判の協力が如何に必要かが現代のサッカーです。

●手・フラッグ
主審はスローイン・ゴールキック・コーナーキック等の手で指示する場合
①腕は40度～45度の角度で肘を曲げないで真っ直ぐに伸ばす。(腕は曲げない)
②手の指先は親指を内側に曲げ、その他の指は揃えて真っ直ぐに伸ばす。
(手をパーにしない)
副審のフラッグの持ち方
①フラッグのグリップに対し人差し指を伸ばし添えて握る(糞握りはしない)
②フラッグは指示方向の腕に必ず持ち替えて上げる。
③選手の攻撃している方向の腕はフリーにしておく。
(ON SIDEやON LINEの指示はフラッグではなく、手で指示するため)

●イエローカード・レットカード
イエローカード・レッドカードは直ぐに出し易い様に、カードケースに入れないで
パンツのポケットか上着の両ポケットの別々に入れておくこと。
要は赤か黄色か素早く出せる態勢を整えておく。

●主審の確認事項
①キックオフポイント・P.K.ポイント・コナーアークにボール載っているか確認する。

②ゴールインした時は必ずペナルティーエリアの中に入って、副審と確認のうえ笛を吹くこと。
(ゴールインは慌てて吹かないでペナルティーエリア中で)

③ゴールイン後のスコアーカードへの記入は、歩きながらエリア内で記入しない事。
ゴールイン後キーパーや選手の小競り合いの有無を確認後キックオフ時の
主審の位置へ戻ってスコアーを記入する)

④コーナーキック・フリーキック時の選手間の小競り合いの有無の確認

⑤ゴールキーパーのパントキック時におけるハンドリングの有無を副審と確認する。
キーパーがボールを保持した時、素早く主審はバックステップや半身走行でボールの
落下地点へ行き、キーパーがエリアの外でパントキックしてハンドかどうか副審をみる

⑥オフサイドの確認
新ルールのオフサイドになってから、攻撃側の競技者がボールを触れるか
相手側競技者に干渉するか、守備側の競技者がボールに向かうかによって
オフサイドになるが、何れにしても従来と違い副審のオフサイドの旗を上げるタイミングが
遅くなる為、主審はボールが蹴られたら副審を何度も見て、オフサイドの見逃しをしない
様にする。

⑦ペナルティーエリアに近いフリーキックの場合
主審がオフサイドラインをキープし、副審はゴールラインをキープさせる指示を
主審は副審へ速やかに指示確認する。

⑧出血の確認
選手の顔面へボールが当たった時は、ゲームの進行状況をみて、プレーを止めるか
アウトオフプレーになるまで待ってから、必ず出血の確認を行う。

⑨選手のユニフォーム確認
試合中に選手のユニフォーム又はストッキングが適切ではなくなった場合は、
アウトオブプレーになってから直させる。

●ミスジャッジを恐れない！
ミスジャッジは次のプレーが再開されなければ、訂正できる。
ミスジャッジをしたと自覚した時や、副審よりの助言でミスが判明した場合は、
真摯に事実を受け入れ間違いを訂正する。ミスを訂正するのは"主審の勇気"です。
<u>※サッカーの審判において"後悔は進歩の糧"になります。
ジャッジ対し"ああすれば良かった、こうではなかったか"は次のより良いジャッジに
繋がります。後悔し反省し、第三者の適切なアドバイスを真摯に聞く姿勢が
良い審判員です。</u>